

機関番号：16102

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20500660

研究課題名 (和文) 乳幼児への絵本の読み聞かせとコミュニケーション能力の発達

研究課題名 (英文) What kinds of picture books develop communication abilities between parents and young children aged 0 to 3?

研究代表者 佐々木 宏子 (SASAKI HIROKO)

鳴門教育大学・社会連携課・非常勤研究員

研究者番号：20122921

研究成果の概要 (和文)：絵本は、乳幼児の (0・1・2 歳児) のコミュニケーション能力をどのように育むかを調査した。まず、絵本のタイプを A「ナンセンス・ユーモア絵本」と伝統的な B「物語絵本」に分けた。約 20 組の親子に 3 年間で AB タイプの絵本を各 30 冊ずつ 60 冊貸与し、親子で読み合いの記録を採ってもらった。その結果、A タイプの絵本は言葉を獲得する前の乳幼児をもつ親子に豊かなコミュニケーション能力を育むことが分かった。

研究成果の概要 (英文)： There are two types of picture books ,— (A) nonsense and humor-filled picture books and (B) cognitive picture books in Japan. According to my research data, the former to the latter developed communication between parents and young children through the use of gestures, body language and variety in tone.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	2, 200, 000	660, 000	2, 860, 000
2009 年度	700, 000	210, 000	910, 000
2010 年度	700, 000	210, 000	910, 000
総計	3, 600, 000	1, 080, 000	4, 680, 000

研究分野：乳幼児教育学・保育学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：赤ちゃん、読み聞かせ、コミュニケーション、物語絵本、ナンセンス・ユーモア絵本、絵本の記録

1. 研究開始当初の背景

絵本の読み聞かせについては、近年様々なところで学力問題と重ね合わせて議論されている。国際的には 2003 年に行われた経済開発協力機構 (OECD) の「生徒の学習到達度調査」(PISA) においてフィンランドが総合点で「学力世界一」となった。とくに「読解力」は、日本が前回の 8 位から 1 4 位になったにもかかわらずフィンランドは、前回の 2000 年に引き続き 1 位であり、その理由の

一つとして読書へのつよい関心があげられる。(教育科学研究会 『なぜフィンランドの子どもたちは「学力」が高いか』2005、国土社)

2. 研究の目的

本研究においては、フィンランドの読書と学力の相関関係にたいする認識やブックスタート運動 (2001 開始) の子育て支援的なネットワーク活動をも視野にいれつつ、その

環境要因としてもっとも解明が急がれている保護者（読み手）と乳幼児（とくに最初は0・1・2歳児）との関係において、コミュニケーション能力の発達という視点からさらに深く研究・解明する。

3. 研究の方法

絵本の読み聞かせを研究するとき、従来の研究では取り上げる絵本の種類や特性についてあまり深く検討されることがなかった。一般的に「赤ちゃん絵本」「幼児向け」などの概念から選択されたり、「人気のある読み継がれた絵本リスト」を参考に研究対象絵本として抽出されたりというように、きわめてその尺度が曖昧なままにされていたように思われる。

そこで本研究においては、コミュニケーションを促すA「ナンセンス・ユーモア絵本」と伝統的な知識・カタログ絵本も含むB「物語絵本」を分けて選択分類し、それらの二つのタイプの絵本が0・1・2歳の赤ちゃんにどのように受け入れられるのか、また受け入れられないのか。それは、親子関係や読み手と赤ちゃんの資質によってどのように変化するか、しないのか。そのことは、その後の赤ちゃんのコミュニケーションスタイルや言葉の発達、読書傾向にどのような影響を及ぼすのかなど、従来一言で「読書」（読むこと）と言われているものの実態を、より厳密に検討する基礎研究として詳細なデータを収集する。

(1) 選書の基準（第1期）

A「ナンセンス・ユーモア絵本」10冊

これらの絵本は現実の世界の事物や現象と明確には対応していないので、このタイプの絵本に出会うと多くのおとなは「意味」が分からず宙ぶらりんになり困惑するが、0・1・2歳児はそうではない。この種の絵本は、

①日本語の音韻とリズム—オノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語・擬情語）の多用により身体のリズムを生み出す。

②ナンセンスで脈絡はないが、掛け合い・動作や動きを引き起こす。

③読み手（大人）と聞き手（子ども）の間に共鳴を促す、等である。

初年度の具体的な絵本タイトルとしては、『ちへいせんのみえるところ』（長新太／ピリケン出版）、『じゃあじゃあびりびり』（まついのりこ／偕成社）、『ぴよーん』（まつおかたつひで／ポプラ社）、『がたんごとんがたんごとん』（安西水丸／福音館書店）、『ととけっこうよがあけた』（こばやしえみこ／ましませつこ／こぐま社）、『もこもこもこ』（たにかわしゅんたろう／もとながさだまさ／文研出版）『ころころころ』（元永定正／福音館書店）、『コップちゃん』（中川ひろたか／100%ORANGE/ブロンズ社）、『まてまてま

て』（こばやしえみこ／ましませつこ／こぐま社）、『チュウーチュウーこいぬ』（長新太／BL出版）。

B「物語絵本」10冊

このようなタイプの絵本としては、図鑑風の「ものの絵本」や「知識・カタログ絵本」、シンプルな「物語絵本」がよく知られている。具体的な絵本タイトルとしては、『おつきさまこんばんは』（林明子／福音館書店）、『くだもの』（平山和子／福音館書店）、『どうぶつのおかあさん』（小森厚／藪内正幸／福音館書店）、『たべもの』（内田麟太郎／ひかりのくに）、『しろくまちゃんのほっとけーき』（わかやまけん／こぐま社）、『たまごのあかちゃん』（かんざわとしこ／やぎゅうげんいちろう／福音館書店）、『ねないこだれだ』（せなけいこ／福音館書店）、『きんぎょがにげた』（五味太郎／福音館書店）、『ずかんじどうしゃ』（山本忠敬／福音館書店）『たべたのだあれ』（五味太郎／文化出版局）

(2) 研究協力者の選抜

地域差を考え、全国のブックスタートが行われている地域より各5組の親子を選抜する。その理由は、親子が絵本の読み聞かせの実践をすでに経験していたり、赤ちゃん絵本についての一定の認識を持っているため記録を採ることや面接がスムーズにゆくと考えられるからである。

①岡山県岡山市の民間読書団体とは15年以上の交流があり、筆者は「赤ちゃん絵本」についても研修・講義を何度も行っている。この地域より5組を選抜。

②徳島県鳴門市の鳴門教育大学附属図書館児童図書室より5名選抜。ここでは毎年筆者が「赤ちゃん絵本」のワークショップを行っている。

③北海道恵庭市より5名選抜。ブックスタート運動のモデル地域であり、すでにその後のフォロワーアップ事業も行っている。その事業では筆者が編集に関わった『赤ちゃんの絵本箱』（こどもと本—おかやま—、2001吉備人出版）も採択されている。

いずれも、赤ちゃん絵本についての関わりが豊かで、絵本にも強い関心と興味をもつ親子を抽出する。絵本という文化財が子育て環境の優れた要因になることの証明は、そのことが自覚できる親の意識がかなり重要な影響をあたえることが予想されるために、あえて明瞭な記録と「語ること」のできる父母を選抜する。ケース研究におけるこの理由の大切さは、すでに筆者の研究によっても証明されている。（佐々木宏子『絵本はあかちゃんから』2006、新曜社）

(3) 調査手続き

①それぞれの地域でブックスタートの関係者などから予備知識を得た上で筆者が直接面接をした後、原則として0歳児をもつ親

子を各5組、記録協力者として選抜する。ただし、同じ月数の乳児にはこだわらない。理由は、月数を統一することよりも「記録がうまく採れる」ことを優先するためである。

②それら家族に各10冊ずつ計20冊の絵本を、毎年3年間計60冊、特にコメント抜きに貸与し、日常生活の中でごく普通に読み聞かせてもらうことを依頼する。その際、貸与絵本を強制的に読ませることなく、あくまでも自然の状態を対象児の選択にまかせるよう促す。また、その家族が自主的に購入した絵本があればそれも自然のままに併せて読み聞かせるよう指示する。

③それぞれの月に一番愛着をもち好んだ絵本については、可能ならばビデオ記録に撮りそのときの行為や反応の状況、しぐさ・発声などもノート記録に採るように依頼する。そのためにデジタルビデオカメラやその付属品も希望者にはそれぞれに貸与する。

④それぞれの協力対象家族とは、年3回程度直接に面接をする。ノート記録、ビデオ記録などを参照しつつ疑問点や不明瞭な問題点を整理し、その話し合いを録音する。

⑤ある程度、事実関係や新しい発見があったときは映像資料をエピソードごとに編集する作業を開始する。

4. 研究成果

(1) 本稿において公表する研究成果のデータについて

今回の研究では最初から一定の水準をクリアした研究協力者が抽出されている。その結果、膨大なデータが得られたが、本稿では紙幅の制限もあるため、協力者親子の組み合わせを以下のような4タイプに分けて、その中から2例を中心に分析・考察してみることにする。

単純な図式化は避けたいが、様々なタイプの読み聞かせが行われるための親子の組み合わせとしては、以下のような4タイプが考えられる。

Aタイプ：親も絵本を読むことが巧みであり、子どもも豊かな反応を返す。→このコミュニケーションの循環がうまく行くと、記録には絵本についての新しい発見や子ども理解が随所に現れる。親も子ども双方が新しい自分と他者が発見できるようになり、読むことが生活の中に定着する。

Bタイプ：親はかなり積極的で巧みな読み手であるが、子どもの側があまり興味や関心を示さない。→このような状況の場合、様々なバリエーションが生じる。徐々に循環がAタイプのようになる場合、あまりにも子どもの反応が少ないと親の側に面白さが見いだせないまま、子どもへの読み聞かせに熱意が持てない場合など、様々である。

Cタイプ：子どもは熱心に読みたがるが親

の側が様々な理由から読み聞かせに熱意が持てない。このような場合、子どもが親に向けて読んでもらうための涙ぐましい努力をすることもある。→親の側の変化によりいくつかのバリエーションが生じる。

Dタイプ：親も子ども絵本を読むことにあまり興味・関心を持っていない。他の遊びやお稽古事に熱心な場合もある。→何かのきっかけで変化が生じ、本が生活の中に迎えられることもある。

(2) 本稿の分析対象となった家族

本研究においては、親の側の意欲などを確かめつつ厳格に研究協力者を抽出したが、半年から1年後には50%近い協力者が脱落し始めた。励ましながら継続を促したが、強制することはしなかった。強制することで成果が生まれることは、時間的な制約もあるが大変難しいからである。従って、2008年度に研究を開始した後でも、新しい協力者を3地域並びに札幌、京都より漸次導入した。

本稿の分析・考察対象者としては、Aタイプの中から2家族を選抜した。そのプロフィールは以下の通りである。

[Case-1] (以下、C-1と略)

①記録者：母親(30代)

②対象児：次男(2006年3月17日生/記録開始時2歳3か月)、三男(2008年2月2日生/記録開始時4か月)。他に長女(記録開始時小学校1年生7歳)、長男/記録開始時幼稚園年中組4歳)

③記録期間：2008年6月～2009年1月(第5子妊娠・出産、県外引っ越しなどで中断、再開の意志あり)

[Case-2] (以下、C-2と略)

①記録者：母親(20代)

②対象児：第1子長男(2007年11月2日生/記録開始時1歳1か月)

③記録期間：2008年12月～現在

(3) 2ケースの記録の具体例

記録にはすべて実名が出ているが、個人情報であるため、筆者がプロフィールで述べたような「長男・長女」などに置き換えてある。また太字は当時の筆者のコメントをそのまま掲載してある。筆者は記録が送られてくるたびに、必ずこのようなコメントを書き込んで記録者に届けた。従ってここでのデータは、筆者のコメントも織り込んだものであり、各記録者に送り返されたものである。

C-1

2008年7月29日 就寝前

『コップちゃん』/対象は次男と三男

3回、読まされました。

1回目：ただただ真剣に聞き入ってました。三男(5か月)は、何となく本を目で追っておりました。(2回目以降は飽きたのか、う

つぶせになって遊んでました)

2回目：コップちゃん、ブブー、ブブーのページで、「ブブー、ブブー」と同じように言ってました。そして、コップちゃん、いないいない、ばあのページで、「ばあ！」といいながら、喜んでました。そして、私が、三男の方に向けて、もう一度「いないいない、ばあ」と言ってあげると、三男は、ニコリ。本は見えていませんでしたが、私の方を見て喜んでました。

ジュースをいれていくところでは、「オレンジジュース？」の問いに、お姉ちゃんが「オレンジ色だから、オレンジジュースだよきっと」と答えてくれました。

3回目：「ゴロン」「ばあ」「トクトクトク」「カンパイ」「ごくごくごく ああおいしい」の所だけは、読みに合わせて言ってました。

もう覚えたのかな?? 子供ってすごくなって思いながら読んでおりました。ものすごくシンプルな本なのに、子供たちには大好評でした。人気の秘密は何なのでしょうかね??

私は本を選ぶとき、つついストーリーの中に、何かしらの教訓があるものをつい選んでしまっておりました。私の、絵本に対する考えを変えてくれた本です。

ついで昨日岡山チームのお母さん方とワークショップを行ったのですが、まったく同じ感想が聞かれました。読み手が参画できる空間がたくさんあり、言葉のやりとり行為の模倣による参画など、コミュニケーションを自然に促す効果をもっていますね。(佐々木コメント)

2008年7月29日 就寝前

『もこ もこもこ』

「しーん」と読んだだけで、次男はワクワクするような笑顔でした。

そして、「もこ」というと、もっとドキドキ、ワクワクというような笑顔。

どんどん大きくなってくるもこもこ、よきによきにお姉ちゃんたちが「わあ、でっかくなった～」と大声で興奮気味でした。

そして「ぼく」と食べられたシーンでの長男の表情が、「ギョッ」として、びっくりした感じでも面白かったです。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんは「わあ、食べられた!!」と楽しそうで、兄弟間のギャップが楽しかったです。

「つん」と出てくるところでは、次男の表情はちょっと怖がったような感じでしたが、お姉ちゃんたちが「何か出てきた～」と喜んでいっているのを見て、安心したのか、笑顔に。

「ぷうっ」というところでは、音が面白かったのか、「ギャハハハ…」とみんな大笑い。

それを聞いた三男は、何事だ? と言わんばかりに、みんなのこを見つめていました。

相変わらず、本を私の手から取りたくて仕方がない様子の三男です。

ぎらぎらのページでは、「太陽?」とお姉ちゃんたちが言ってました。

そして、最後の「しーん」で「いなくなっちゃったね～」と次男は言ってました。

つんのところでくすぐったそうな顔の子ども、ぎらぎらで万歳をする子ども泣く子どもなど、本当に豊かな反応を引き出す絵本です。単純なおノマトベと単純な絵ですが、力がありますね。(佐々木コメント)

2008年8月31日 就寝前『よるくま』(酒井駒子)

お姉ちゃんが大好きで、久々に読んでといわれて読むことになりました。

今までも何度も読んでいましたが、次男は今までなんの反応もありませんでした。

じっと聞いていた次男でしたが、よるくまはどうとうほんとうに泣きだしたよ…というシーンになると、悲しそうな顔をして、「お母さんいないんだって…」と言ってました。お姉ちゃんは「いるって! 最後まで聞いてなよ」と次男に言います。

年齢によって想像力の深みが違っていることがよく分かりますね。(佐々木コメント)

続けていくと、お母さんが見つかりました。

次男は「よかったね、よかったね!!」と言っています。

のこりのさかなはおさかなやさんにうりましよう…というページでのイラストではお兄ちゃんは、「どうして月が2こあるの??」と、湖に映った月を見て不思議そうに反応しています。

お兄ちゃんはストーリーよりも、挿絵の月に興味を持ったようでした。

最後は おやすみで終了ですが、お姉ちゃんは「これってこの男の子の夢だったのかな??」といつも聞いてきます。

私もいつも答えに困ってしまうのですが、これはどう解釈したらいいのでしょうか?

私の解釈ですが、これはこの少年「ぼく」と彼のぬいぐるみとの対話(自己対話ですが)だと思います。自分も一人で眠らなければならぬ寂しさをくまに託してお話を作っているのだと考えます。しかし、それはおとなの解釈ですから、お子様の解釈には「そうかもしれないね」という肯定でよろしいのではないかと思います。歳と共に解釈に変化が出てくると思います。新しい解釈が出て来たときは教えてください。(佐々木コメント)

c-2

日時：2008年12月3日(水)21:00頃：

夜、風呂も入り、すっかりご機嫌で、
長男（読み聞かせ時1歳1月）
作品名：『もこ もこもこ』（谷川俊太郎作
もとながさだまさ絵）

なかなか眠らず、何冊か自前の本を読んだ
後、私のチョイスで。部屋は薄暗い状態。
反 応：面白い反応。

絵も文も独特の間があるので、静かにして
から読み始めました。「しーん」と出だしの
ページを読むと眉間にしわを寄せて、本と私
を見比べました。

**お母様の表情から意味を取ろうと参照し
てますね。面白いですね。（佐々木コメント）**

いつものような具体性のある絵（食べ物や
車）も言葉もないので不思議に思っているよ
うな印象でした。次のページ「もこ」と言う
と、また眉間に皺をよせて本と私を見る。
次のページ「もこもこ」と言うと笑顔で「き
ゃっはあ！（Kyahhaa）」。途中がむしゃら
に次々とページをめくろうとするのを阻止
しました。次のページからは読むたび笑い声
を發して興奮。つん、のページでは赤い腫れ
物を触りながら笑い、ぼろり、ではカタカタ
ブツと風船（らしきもの）がふくらんで割れ
ていく過程も面白いらしく、割れるページは
何度も開いて読めと指示。最後のもこ、にな
ると私から本を奪い取り自分でパラパラめ
くりました。反応が面白いので、そのまま夫
にバトンタッチして読んでもらいました。

夫は風船が割れるシーンで、両手をパチン
っとたたきながら大声で読んだので長男は
大喜びして自分もパチンと手を叩き興奮。結
局二人で6回くらい続けて読みました。ちな
みにこの本は興奮度合いが高く、しばらくは
毎日読みました。

私は「ふんわふんわ」のページで、手のひ
らを阿波踊りのようにヒラヒラさせながら
読みますが、それも笑えるらしいです。

**本当に不思議な絵本です。ご長男はまり
込んだようですね。オノマトペのリズムの面
白さだと思いますが、お母様はどのように解
釈されたのでしょうか？ また、あとで教えて
ください。（佐々木コメント）**

その後もときどき読む程度だったのです
が、ある日、私が 読んでいて「ぷう〜」と
言うと、待ちきれないように「パーン(Paan)」
と言って手を叩いたので、「お！覚えてるん
だ。じゃあ、絵だけめくって見せたらどうだ
ろう。」と思い試してみました。私の予想以
上の反応でした。

ページをめくっても読まない私に、はじめ
はキョトンとしていましたが、「はい、マサ
イチ（仮名…筆者）読んで」とうながすと「ち
ー」「もこ」「つん」「ぷわぷわ」と、あまり
文字では表現できないのですが、なかなか原

文に近い感じで読むのでひどく感動してし
まいました。

**イントネーションやリズムなどをおそら
くお母様の通りに模倣して読まれたのでし
ょうか？ それとも、独自の読みだったでし
ょうか？ また、教えてください。（佐々木
コメント）**

その結果が面白くて、今度は夜、寝ていて
真っ暗な状態で「しーん」と言って話をふっ
てみると、やはり続きを結構言いました。も
ちろん完璧ではなく、途中をとばしたり、気
に入ってるブワブワブワだけ言ったりいろ
いろです。

この出来事がとても面白かったので、以降、
寝る時はこのスタイルを使う事が多いです。
これを読書と言っていいのか不明ですが、私
は勝手にエア・リーディングと名づけて使っ
ています。

**絵本のテキストを掛け合いで再現するこ
とは、子どもは大好きです。「いまここ」を
超えて、もう一つの世界で遊ぶことは、子
どもなりにとても魅力のあることなのでしょ
うね。**

**人間の子どものしにできない素晴らしい
能力ですね。何かの遊びに夢中になっている
ときでも、背中越しに仕掛けるとちゃんと反
応を返してくれることもあります。とっても
おかしいですよ。（佐々木コメント）**

長男には発音できないような本でもやり
ます。例えば、「ねないこだれだ」の場合私
が「時計がなります」と言うとマサイチが「ボ
ーンボーン」と続けます。

以降「黒猫どら猫」と私が言うと「ニャ
ー！！」「おばけの世界へ飛んでいけ」とい
うと「あー、イーヤー」などと続けます。
原文にはないのですが、イーヤーなどは私が
女の子の気持ちになって、付け加えて読んで
いるので、それを覚えているようです。

ここまで書いてて、「こんな読み方してて
いいのかしら。もっと忠実に読んだ方がいい
のかな」と不安になってきました。

**どうぞ、どんどん遊びに使ってください。
子どもは、キチンと読むこととこのように遊
ぶことをしっかり分かってやっていますから、
少しも心配は要らないと思いますよ。**

（佐々木コメント）

(4) 結果の分析と考察

☆まず、全体として絵本を読み聞かせる
という行為を通して生じるコミュニケーション
(親子双方の応答性の豊かさ) 能力の間
には、記録者の間で大変大きい差異が見られた。

C-1、C-2は、いずれもAタイプに属する組
み合わせであり、随所に子どもへの観察の細
やかさと解釈の深さ、コミュニケーションの

ための工夫が見られた。

読み手である親の側の資質としては、

- ①親の絵本の読み聞かせの巧みさ。
- ②親の乳幼児とのコミュニケーションの取り方の巧みさ。つまり、子どもの豊かな応答性を引き出すための工夫の巧みさ。
- ③絵本の読み聞かせの際に乳幼児が見せる様々な反応への観察力と解釈の質の豊かさ。その結果、直ちに新しい状況の出現に応じたさらなる工夫の開発と仕掛け。
- ④それらを文章化して記録にすることの巧みさ、がある。
- ⑤前述①～③の巧みさに欠けていると、読み聞かせそのものがうまく行かず、読み聞かせるといふ行為への興味や関心が薄れて行くことになるが、その程度は様々である。

また、読み聞かせを通してのコミュニケーション能力の開発には、読み手である親側の資質だけではなく、子どもの側の資質にも大きく影響を受ける。その指標としては、

- ①乳幼児が音声やジェスチャー、身体の動き、表情をつかって生き生きと反応する資質をもっている。
- ②姉兄が存在し、彼女／彼らが日常的に絵本を楽しむ姿があると対象者である子ども達は、大きな影響を受けている。環境として絵本が存在するだけではなく、「絵本を楽しむその面白さを豊かに表現する子どもが身近に存在する」という環境の存在が大きい。

逆に絵本への興味・関心が少ない子どもの場合は、資質や言葉の発達の違いなど様々な要因が考えられるが、

- ③絵本よりも親や他の子どもと遊ぶことが好きな子ども。
- ④選書した絵本よりも市販の絵雑誌などに興味をもつ子。
- ⑤テレビやアニメーションビデオの方が好きな子、などの要因が影響を与えている。

親が読もうとしても「子どもの側が興味を示さない」や「子どもの側からのめぼしい反応がなく、記録をどう採ってよいか分からない」といような発言は、やがて記録の継続が断念される代表的な理由となっている。

☆「ナンセンス・ユーモア絵本」は、言葉が獲得される前の子どもと大人の間で、有効なコミュニケーションツールとしての役割を果たしている。

C-1の「私の、絵本に対する考えを変えてくれた本です」や、C-2の記録者の「なかなか原文に近い感じで読むのでひどく感動してしまいました」の発言にも見られるように、子どもの側の予想を超える発言・しぐさ・表情などの反応に、読み手の親側はコミュニケーションの確かな手応えを感じる。

これが伝統的なファーストブックである「物語絵本」の場合、その反応は言葉による命名などの正確さに集中化されたり、既成の

物語世界の理解に親子双方が、最初から枠づけられた読み取りに誘導されてしまう。

もちろんそのような読み合いも有意義で楽しいが、それは言葉が獲得された後に始まる道筋である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①佐々木宏子 絵本が切りひらく他者の心へのイメージ生成、教育と医学、査読無、No.663、2008、39—44

[学会発表] (計2件)

①佐々木宏子 (指定討論者)、福岡貞子他、「乳児の絵本・保育課題」(シンポジウム)、日本保育学会第62回大会(千葉大学)2009年5月17日

②SASAKI HIROKO A new tendency among baby picture books in Japan :Surrealistic nonsense picture books for babies. International Conference on Children's Books from 0 To 3: Where literacy begins. (Picture Books Museum Burg Wissen, Troisdorf, Germany.) 21, March. 2009.

[図書] (計3件)

①佐々木宏子、松居直他(NPO ブックスタート編著)、岩波書店、赤ちゃん絵本をひらいたら、2010、200—223 (座談会)

②佐々木宏子、磯沢淳子他(福岡貞子他編著)、ミネルヴァ書房、乳幼児の絵本・保育課題絵本ガイド、2009、100—105 (分担執筆)

③佐々木宏子、他 財団法人出版文化産業振興財団、読む・調べる・伝える、2008、6—25 (分担執筆)

[その他] (計3件)

①HP:<http://www.tv-naruto.ne.jp/tn1658823/>
(この中には2009年3月にドイツの国際会議で発表した、「学会発表文献②」が含まれているので参照されたい)

②佐々木宏子、細谷亮太(NPO ブックスタート編)対談:赤ちゃん絵本をひらくひととき、2010、総頁48

③記録DVD 5本編集(・ドイツ国際会議発表ビデオ(英語)30分 2009、・Tの記録(日本語)30分 2010、・Sの記録(日本語)40分 2011、・兄さんと弟(日本語)40分 2011、・Uの記録(日本語)40分 2011)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 宏子(SASAKI HIROKO)

鳴門教育大学・社会連携課・非常勤研究員
研究者番号:20122921

(2)研究分担者:なし。